

## 会員の声 1945 年生まれから見た“戦争と平和”(その 5)

金沢支部 平口 哲夫

前回「その 4」で記したように、高校生のとき『世界の歴史』(中央公論社)を全巻読んだ。この本は『1 古代文明の発見』(1960 年発行)から『16 現代一人類の帰路』、『別巻 地図・年表・小辞典』(1962 年発行)まであり、当時、自宅で机に向かって勉強中の様子を撮った写真には、本棚に『世界の歴史』が並んでいるのが写っている。

このうち『15 ファシズムと第二次大戦』(1962 年発行)の「日華事変」には、「かの悪名高き南京残虐事件をひきおこした」という本文記述と、「南京大虐殺。刑場へ運ばれる中国人捕虜」というキャプション付きの写真が掲載されているが、その具体的内容については述べられていない。また、この巻の付録「座談会・執筆者にきく 15」には、「日本軍も南京の虐殺なんかやったけれども、ドイツ人がユダヤ人を虐殺したようなああいふ大がかりな民族のみな殺しということ、これはちょっと日本では考えていなかったと思いますね。」とか、「日本軍の虐殺というのは、僕は日華事変のときに、だいたい戦場を従軍記者で歩いたけれども、激戦のあったところで、そのあとで虐殺をやるんだな。だから、わりあいかんたんに占領したところはなんにもしないのだよ。要するに、自分の友達が殺された、よしやってやろうというようなことなんだな。それで南京の場合は相当な激戦で、損害も受けたわけだな。そしてあそこは首都ではあるし、国際的に目だったということだな。それで大きく問題として取り上げられたけれども、小さいところではもっとひどいことをいくらでもやっているんだ。」などと語られているけれども、どのような虐殺があったかについての具体的な記述はない。

高校 2 年のときに受けた「世界史」の授業では、日本関係のことは、教科書には記されているが、授業中に話題にされることは少なかった。また、高校 3 年のときに受けた「日本史」の授業では、担当の先生は、第二次大戦から戦後にかけての歴史を学ぶことも大切だが、残念ながら授業ではそこまで話す時間的余裕がないので、自学自習しておいてほしいという主旨のことを述べておられた。

要するに、高校生の頃までは、第二次世界大戦で自国民が受けた被害については具体的に知ることができたが、他国民に与えた加害の実態については知らないままであった。加害の実態を知るようになるのは大学入学後のことである。

1965 年(昭和 40 年)4 月に東北大学文学部に入学、簡易アパートでの自炊生活を 1 ヶ月、簡易旅館での下宿生活を 2 ヶ月ほど経験してから東北大学基督教青年会館(溪水寮)に入寮した。この建物はアメリカ生まれのウィリアム・メルル・ヴォーリズ氏とヴォーリズ建築事務所の松井覚治氏の共同設計、ならびに竹中工務店東京支店の工事請負により 1935 年(昭和 10 年)12 月に完成した。私が入寮した当時の住所表示は、仙台市上杉山三丁目 7 番 8 号であった。会館建設の直接のきっかけは、当時、東北帝国大学の哲学第二講座(古代中世哲学)担当だった石原謙教授が「東北帝大のキリスト者学生のために寄宿舎を建てたい」という意向を弟子に漏らしたことによる。石原先生は、1940 年(昭和 15 年)12 月に東京女子大学学長に就任(～1948 年)、1973 年(昭和 8 年)に文化勲章を受章しておられる。第二次大戦後の 1946 年(昭和 21 年)に会館は米軍施設として接收されるが、1952 年(昭和 27 年)に返還され、改築工事が行われた。1990 年(平成 2 年)、八木山の仙台市太白区大崎町(おおとやまち)8 番 1 号に会館を新築移転した。現在は東北大学に限らず、仙台市内の男女学生を対象として寮生募集を行なっている。

右に掲載の画像は旧・東北大学基督教青年会館を写したものであり、『東北大学キリスト教青年会七十五年誌』(2003 年発行)より転載した。この会館にまつわる「戦争と平和」関係の逸話については、次回「その 6」でも述べる。

さて、私が入学した 1965 年から大学 3 年生となった 1967 までの間に刊行された『日本の歴史』(中央公



論社)は、前述の『世界の歴史』と同じく父が購入したものであり、帰省のたびに仙台に持ち帰ったので、寮の自室に備え付けの本棚に全巻(本巻 26 冊+別巻 5 冊)が揃うことになった。その第 25 巻『太平洋戦争』(1967 年発行)の「宣戦なき戦争」には、「南京占領と虐殺事件」の小見出しで 2 ページ分の記述があり、「南京事件の子女虐殺死体」のキャプションを添えた写真が挿入されている。その一部を以下に紹介する(漢数字はアラビア数字に変換、行替えは省略)。

“南京城にたいする攻撃は、12月10日から開始され、13日には日本軍の手中におちた。国民政府は漢口に逃げのびていた。そしてその日から、日本兵は捕虜の虐殺をはじめた。当時、旅団長として攻撃を指揮した佐々木到一(とういち)は、つぎのように書いている。「(13日)午後2時ごろ概して掃討をおわって背後を安全にし、部隊をまとめつつ前進、和平門にいたる。その後俘虜ぞくぞく投降し来たり、数千に達す、激昂せる兵は上官の制止をきかばこそ、片はしより殺戮する。多数戦友の流血と10日間の辛惨をかえりみれば、兵隊ならずとも『皆やっしまえ』といいたくなる。白米はもはや一粒もなく、城内にはあるだろうが、俘虜に食わせるものの持ち合わせなんか我軍には無い筈だった。(略)(14日)城内にのこった住民はおそらく10万内外であろう。ほとんど細民ばかりである。しかしてその中に多数の敗残兵が混入していることは、当然であると思われる。(略)敗残兵といえども、尚(なお)部落山間に潜伏して狙撃をつづけるものがあった。したがって抵抗するもの、従順の態度を失するものは、容赦なく即座に殺戮した。終日、各所に銃声がきこえた。太平門外の外濠が死骸でうずめられてゆく」「南京後略記」(『昭和戦争文学全集』別巻所収)。その後も、みさかきもなく一般民衆にたいする虐殺がつづくのであり、15日の夜だけで2万人が殺されたといわれる。ドイツ人を責任者として南京につくられた国際救済委員会は、4万2千人が虐殺されたと推計し、そのほか、南京進撃の途上で30万人の中国民が殺されたと見積もられている。このニュースは世界に大々的に報道されたが、日本人は、戦後の東京裁判で追及されるまで、この事件を知らないでいた。”

私は教養課程を含む学部4年間を寮生として過ごし、修士課程2年間は文学部のある片平丁に隣接した米ケ袋で間借り生活、博士課程に進んだ1971年(昭和46年)4月から主事として2年間寮生活、大学院最後の1年間は米ケ袋での間借り生活に戻った。寮では朝日新聞を購読していたので、1971年8月から12月にかけて全40回にわたって同紙に掲載された、本多勝一氏による「中国の旅」のルポルタージュを読んで『日本の歴史』の記述を上回る大きなショックを受けた。

このルポルタージュについては、記事に合わない写真が掲載されているなどの批判がある。しかし、たとえ一部に不適切な箇所があっても、記事全体としては、著者が依拠していない様々な傍証も多々あるので、事実無根とみなすことはできない。

虐殺された被害者数に諸説があり、確定しがたいことから、「南京大虐殺」とは称せず、「南京事件」、「南京虐殺」などと称することも通用している。しかし、たとえばベトナム戦争中の1968年3月16日にアメリカ陸軍の1小隊が南ベトナムのソンミ村の1集落(人口507人)を襲撃し、無抵抗の村民504人(男149人、妊婦を含む女183人、乳幼児を含む子供173人)を無差別に殺害した事件を「ソンミ村虐殺事件」と称するのと同列に扱うには、「南京虐殺事件」は規模が大きすぎるので、「南京大虐殺」という呼称が不適當だとは思えない。

なお、1990年代から2000年代にかけて読んだ関連文献にジョン・ラーベ著『南京の真実』(講談社1997年発行)、南京事件調査研究会編『南京大虐殺否定論13のウソ』(柏書房999発行)、ジョシュア・A・フォーゲル著『歴史学の中の南京大虐殺』(柏書房2000年発行)などがある。自国に都合が悪いからといって「あったこと」を「なかったこと」にしようとするほど、これでもかという反証が次つぎと提示されることになる。自国が犯した誤りを指摘して歴史の教訓とすることを「反日」「自虐」呼ばわりするのは筋違いの批判である。

ただし、歴史教育においては、生徒の年齢に応じた配慮が必要であり、なんでもあからさまに教えればよいというものではない。たとえばキリスト教のバイブルには旧約聖書(The Old Testament)と新約聖書(The New Testament)があり、このうち旧約聖書はユダヤ民族の歴史書でもあるから、日本語の「聖書」という語感とは違って、残酷なことも「ふしだら」なことも、いろいろ記されている。そのいろいろなことを、教会学校やミッションスクールで、あからさまに教えているわけではない。(つづく)

平口哲夫, 2021:「会員の声 1945年生まれから見た“戦争と平和”(その5)」(世界連邦 Newsletter 666, 4-5)を改変。